中國詩文論藪

清水茂著

中國詩文論藪

清水茂著

〔東洋學叢書〕

刊行　創文社

清水　茂（しみず・しげる）
1925年，京都市に生れる．1951年9月，京都大學文學部文學科中國語學中國文學專攻卒業．現在，京都大學文學部教授．專攻，中國語學中國文學．
〔著譯書〕『唐宋八家文』（朝日新聞社），『韓愈』（岩波書店，中國詩人選集），『王安石』（同上），『水滸傳』（岩波文庫，吉川幸次郎と共譯），『顧炎武集』（朝日新聞社），『書經・春秋』（筑摩書房），『語りの文學』（同上），『伊藤仁齋・伊藤東涯』（岩波書店，日本思想大系，吉川幸次郎と共著）など．

〔中國詩文論藪〕

一九八九年二月一〇日第一刷印刷
一九八九年二月一五日第一刷發行

定價八〇〇〇圓

著者　清水　茂

發行者　久保井　理津男
東京都千代田區一番町一七―三

印刷者　鈴木學
東京都文京區水道二―一九―一一

發行所　株式會社　創文社
東京都千代田區一番町一七番地
〒102　電話東京二六三―七一〇一（代表）
振替東京二―九二四七二

文榮社印刷・鈴木製本　ISBN 4-423-19234-9

目次

I 散文論

一 尙書『秦誓』とその周邊……五
二 正始の文章……二四
三 柳宗元の生活體驗とその山水記……四〇
四 日本留下來的兩種柳宗元集版本……六六
五 柳宗元「河間傳」……一一七
六 杜牧と傳奇……一三四
七 北宋名人の姻戚關係——晏殊と歐陽脩をめぐる人々……一六七

II 詩論

一 樂府「行」の本義……一八三
二 「春」「秋」之詞性……二〇一

三　杜甫「城春草木深」の「春」について……二一八
四　「白日」の解釋……二三六
五　詩語の構造――杜牧のばあい……二四三
六　杜牧今體詩の一つの技法――「江南春絶句」詩を中心に……二五八
七　龔鼎孳論……二七三
八　陳維崧の詞……二九四
九　陳其年集の編集出版……三一一
十　徐履忱の傳記と詩……三二六

附　錄

書　評

前野直彬『唐代の詩人達』……三四五
中國社會科學院文學研究所編『唐詩選』……三五〇
吉川幸次郎　桑原武夫『新唐詩選續篇』・倪海曙『唐詩的翻譯』……三六〇
夏承燾『唐宋詞人年譜』……三七二
『浦江清文錄』……三九

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

解　題

王弘撰『山志』……三八七
『聖宋千家名賢表啓翰墨大全』……三九一
『聖宋千家名賢表啓翰墨大全』解題補――北京圖書館藏本について……四〇一
謝枋得『文章軌範』（官板）……四〇八
『增修箋註妙選群英草堂詩餘』……四一三
『欽定詞譜』……四二
あとがき……四三
索　引……1～23

中國詩文論藪

I

散文論

一 尚書『秦誓』とその周邊

一

『尚書』五十八篇（古文）なり、二十八篇（今文）なりを通讀して、最後の『秦誓』篇に至ったとき、それまでの諸篇とちがった感じを受ける。まず感ずるのは、それまでの諸篇が、堂堂たる王言のつらなりであったのに對し、この篇は、後悔の誓いであって、人間の謙遜さを示すからである。しかし、內容の特異性について詳細に述べるのは、後にして、ここでは、さきに、この篇の成立およびその資料としての特殊さに注意したい。

この篇の成立について、『書序』は、「秦の穆公、鄭を伐ち、晉の襄公、師を帥いてこれを崤に敗る。還り歸って、秦誓を作る」といい、その僞孔傳は、「晉は三帥を舍(ゆる)して還り歸らしめ、秦の穆公、過ちを悔いて誓を作る」と說く。

この『書序』・僞孔傳にいう事件は、『正義』にも見えるように、『左傳』僖公三十二・三年（前六二八—二七）にくわしい。すなわち、秦の穆公は、大夫の蹇叔らの諫言を聞かず、晉の文公の喪に乘じて、遠く鄭の國を攻めようとした。三人の將軍、百里孟明視・西乞術・白乙丙は、途中で鄭の防備を聞いて引き返したところを、晉軍に都で敗られ、三將軍は捕虜になった。のち、晉の文公夫人で、襄公の母、かつ秦の穆公のむすめである文嬴の

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

とりはからいで、三人の將軍は秦國に送還され、秦の穆公は、諫言を聞き入れなかったことをわびたというはなしである。

『左傳』三十三年には、捕虜となった三將軍をむかえたとき、

秦伯素服して郊次し、師に郷(むか)って哭して曰わく、「孤、蹇叔に違うて、以て二三子を辱むるは、孤の罪なり。孟明を替えざるは孤の過ちなり。大夫何の罪かあらん。且つ吾れ一つの眚(あやま)ちを以て大德を掩わず」と。

これだけで、『秦誓』についての記事は見えない。

『史記』秦本紀では、繆(穆)公三十二・三年に以上の事件があり、三十六年(『春秋』魯の文公三年)に、晉に對して報復の戰爭を行なって、鄀で戰死した者を埋葬し、「爲に喪を發し、これを哭すること三日、乃ち軍に誓って曰わく……」とあるのが、この『秦誓』である。

いずれにしても、秦の穆公が鄀の戰いで敗れたのち、諫言を聞き入れなかったのを後悔したことは記載されているが、『左傳』では、『秦誓』にふれず、『書序』と『史記』とでは、「誓」のときを異にする。『左傳』には別の悔過のことばを載せるが、文體からいって、『秦誓』より新しいものであり、『秦誓』が『左傳』共通の統一された文體に rewrite されたと考えることも可能である。『書序』と『史記』と、どちらが事實であるか、決定できるだけの資料を缺くが、當面の問題としては、決定せねばならぬ必要はない。ただ、秦の穆公が、鄀の戰いに敗れたのち、後悔を表わす誓いである點では、『書序』・『史記』とも同じであり、それだけで十分である。

なお、『公羊傳』文公十二年、「秦伯、遂をして來たり聘せしむ」の條に、秦の繆(穆)公を賢とする理由として、この『秦誓』の內容をあげているが、そこには、『秦誓』の名もあげず、いつの事件に關していわれるのかもあきらかでない。ただ、秦の穆公の悔過についていっていることがわかるだけである。

以上のように、成立の事情などこまかい點には異同があっても、『秦誓』が、秦の穆公の悔過の誓いであるという點は共通であり、それだけでも、『尚書』の他の諸篇ときわ立って特異なものといえる。すなわち、秦の穆公の「書」であること、悔過の誓いであること、それぞれ他の諸篇とちがう性格を持つことを示すが、まず、秦の穆公の「書」であることについてとりあげよう。

秦の穆公の「書」というのは、諸侯の「書」ということである。『尚書』は、『堯典』から『文侯之命』に至るまで、眞僞を問わず、すべて帝王の「書」であって、諸侯の「書」は、この『秦誓』のほかは、その直前にある『費誓』と、ただ二篇に過ぎない。その『費誓』は、『書序』によれば、周公の子、魯の始封の君、伯禽の「書」[1]であって、『尚書』が、文・武・周公を祖述し、魯を根據地とする儒家の經典[2]であることからすれば、魯侯の「書」が、特に帝王の「書」と並んで、『尚書』の中に收められていることも、それほど異とするに足らないことである。しかし、秦は、魯と異なり、しばしば「虎狼之國」[3]と稱され、野蠻だとされている國である。その秦侯の「書」である『秦誓』が、『尚書』中に收められていることは、奇異な感じがする。更に、『費誓』は、『甘誓』『牧誓』などと同じく、[4]戰鬪の開始に先立ち、部下に戒告を與え、努力せぬものには、刑罰を加えることを宣言したもので、「誓」としては、それがふつうの形である。その點で、同じ諸侯の「誓」でも、戰後に作られた悔過の「誓」である『秦誓』は、『費誓』と異なるのである。

もう一つは、秦の穆公が春秋時代の人、したがって『秦誓』は、春秋時代の「書」であることである。東周以後の「書」は、『書序』によれば、この『秦誓』と『文侯之命』の兩篇だけである。『文侯之命』篇が、晉の文侯（前七八一―四六在位）に對する「命」か、文公（前六三六―二八在位）に對する「命」か、問題の存するところであるが、[5]いずれにしても、東周の王が晉侯に與えたものであって、諸侯の「書」ではない。近人の時代考定によ

る擬作年代は別として、傳統的な『書序』によるかぎり、『秦誓』は、春秋時代に諸侯の製作した「書」としては、『尙書』に收められる唯一の篇であって、他の諸篇が、古くかつ帝王の「書」であるのと、きわ立った特色あるものである。

それでは、なぜ、このように異質な『秦誓』が、『尙書』中に收められているのか。陳夢家は、「伏生本の『尙書』は秦の官本であって、秦の博士によって部分的に編集整理されたものらしい。伏生の傳本が『秦誓』を最後の一篇とするのも、その消息をいくらか洩らすものである」[6]という。ただし、これは、『秦誓』が、秦王朝（始皇帝）のときに擬作されたということでなく、『秦誓』が『尙書』の一篇とされたのが、統一王朝たる秦のときであるという意味であって、陳氏も時代の考定においては、『秦誓』を「西周中期以後的命・誓」[7]としている。

しかし、統一帝國たる秦が、祖先の光輝を示すべく、『尙書』の中にとり入れるなら、「改過」を內容とする『秦誓』のごとき「書」でなくて、もっと堂皇な「書」を收めたと思われる。秦の始皇帝の「治世」を謳歌する刻石が、泰山・琅邪など諸方に立てられている時代に、祖先の失敗をあらわにする「書」が、經書の中に挿入されたとは考えにくい。他の諸篇とは性質を異にする春秋時代の諸侯の「改過」の「書」であるだけに、かえって早くから經典として傳えられていたのではないか。もし、後から挿入するとすれば、むしろ他の諸篇に類似するものが收められるのが自然なように思われる。この『秦誓』が、『禮記』大學篇に長文の引用を持つことは、大學篇成立のときには、『秦誓』がすでに經典としての權威を持っていたことを示す。『禮記』における『詩』『書』の引用は、その所說を確認立證するためのものであるから、傳統的權威をすでに持っているものでなければ、その用をなさないはずである。大學篇が、曾子の著[8]であるか、孔氏の遺書でないか[9]、それらは別として、大學篇成立よりはるか以前、おそらく孔子以前から、『秦誓』は、『尙書』中の一篇であったと考えるべきだと思うのであ

る。

二

ここで、内容の特殊性を取りあげる前に、『秦誓』の原文[10]と僞孔傳・正義による讀みを載せておく。

秦誓。公曰。嗟我士。聽無譁。予誓告汝群言之首。古人有言曰。民訖自若是多盤。責人斯無難。惟受責俾如流。是惟艱哉。我心之憂。日月逾邁。若弗員來。惟古之謀人。則曰未就予忌。惟今之謀人。姑將以爲親。雖則云然。尚猷詢茲黃髮。則罔所愆。番番良士。旅力既愆。我尚有之。仡仡勇夫。射御不違。我尚不欲。惟截截善諞言。俾君子易辭。我皇多有之。昧昧我思之。如有一介臣。斷斷猗無他技。其心休休焉。其如有容。人之有技。若己有之。人之彥聖。其心好之。不啻如自其口出。是能容之。以保我子孫黎民。亦職有利哉。人之有技。冒疾以惡之。人之彥聖。而違之俾不達。是不能容。以不能保我子孫黎民。亦曰殆哉。邦之杌隉。曰由一人。邦之榮懷。亦尚一人之慶。

秦誓。公曰わく、「嗟　我が士よ。聽いて譁ぐこと無かれ。予れ誓って汝に群言の首を告げん。古人言有って曰わく、『民訖く若うことを自うるは是れ盤しみ多し』と。人を責むるは斯れ難きこと無し。惟れ責めを受くること流るるが如くなら俾むるは、是れ惟れ艱いかな。我が心の憂れうるは、日月の逾すます邁ぎて、員に來たらざるが若きことなり。惟れ古の謀人には、則ち未だ予れを就さずと曰いて忌む。惟れ今の謀人には、姑らく將に以て親と爲さんとす。則ち云に然りと雖も、尚わくは猷もて茲の黃髮に詢れば、則ち愆つ所罔からん。番番たる良士は、旅くの力既に愆ぐるも、我れ尚わくはこれを有たん。仡仡たる勇夫は、射

御違わずとも、我れ尙わくは欲せざらんことを。惟れ截截として諞言を善くし、君子をして辭を易え俾むるは、我れ皇いに多くこれを有つ。昧昧として我れこれを思えばなり。如し一介の臣有り、斷斷として猗らにして他技無くとも、其の心休休焉たり。其れかくの如くならば容るること有らん。人の技有るは、己れこれを有つが若く、人の彥聖なるは、其の心これを好む。啻だに其の口より出づるが如くなるのみならず。是れ能くこれを容れん。以て我が子孫黎民を保たば、亦職として利有らんかな。人の技有る、冒い疾んで以てこれを惡み、人の彥聖なるに、而るにこれに違うて達せざら俾む。是れ容るる能わず。以て我が子孫黎民を保つ能わず。亦曰わく『殆ういかな』と。邦の杌隉は、曰わく一人に由る。邦の榮懷は、亦尙わくは一人の慶ならん。」

これで、全文である。そのうち、「改過」をあらわすのは、「古人言有って……」から、「……是れ惟れ艱いかな」まで、又、「惟れ古の謀人には……」から、「昧昧として我れこれを思えばなり」までの部分である。「古人言有って……是れ惟れ艱いかな」は、古注と新注とで解釋が異なる。僞孔傳は、「民訖自若是多盤」の下に注して、「古人の言を稱して、前に忠臣に順わざりしを悔ゆ」といい、順うことによって快樂が得られるのに、そうしなかったことを後悔するように解するのに對し、蔡沈『集傳』は、古人の言を「是惟艱哉」までとし、「穆公前日自ずから徇うに安んじて、蹇叔の言を聽かざりしを悔ゆ」と注し、「民訖自若是多盤」を「民訖く自ずから是くの若く多く盤んず」と讀む。つまり自分の意見に安んじて、人のことばを聽き入れない意味に解する。江聲『尙書集注音疏』・孫星衍『尙書今古文注疏』も、蔡沈とほぼ同じ說である。このばあい、重點は、「責人斯無難」以下にあるので、蔡沈說の方が、「古人の言」を引く目的にかなっているように思われる。そして、引用がおわったところで、「我」が出て來るのである。なお、この「古人の言」は、江有誥『群經韵讀』にも取り上げ

られておらず、押韻されていないと認められているようであるが、盤・難・艱が、韻を踏んでいるようにも思われる。段玉裁の分類によれば、盤・難は古音第十四部、艱は第十三部で、同じ部には屬さないが、鄰接する部で近い。もし、これらが押韻されているとすれば、蔡沈說が正しいことを證する一つの根據となる。このように、部分的には、相反する解釋があるが、全體としては、自分が諫言に從わなかったことを後悔することばとする點では同じである。『尚書』中には、他人に對する敎訓戒告の辭は滿ちあふれているが、自分に對する敎戒の辭はこれだけであって、まず第一に特色としてあげるべきであることは、最初にいったごとくである。

つぎに、「我心之憂。日月逾邁。若弗員來」の句が、注意される。僞孔傳は、「言うこころは我が心の憂れうるは、過ちを改めて自ずから新たにせんと欲すれども、日月は並び行き過ぐるが如く、復た云に來たらざるが如し。改め悔いんと欲すと雖も、恐らくは死これに及んで、益するところ無からんことを」と解釋する。ここで注意されねばならないのは、時間の一回性への目覺めと時間が失われ行くことに對する憂愁が存することである。このような時間の經過に對する認識は、『尚書』の他の諸篇に見えない。『詩經』においても、唐風蟋蟀篇に、「蟋蟀堂に在り、歲は聿に其れ莫れん。今我れ樂しまずんば、日月其れ除らん」と、その第一章にいい、第二・第三章では、韻字だけを替えて、同じ內容をうたうのが、まれな例としてあげられるだけである。この時間の經過の認識によって、『古詩十九首』の主題である「推移の悲哀」[11]がごく原始的な形ですがたを見せているのである。

又、この三句が、『詩經』と言語的にも近いことも注目してよい。その第一句「我心之憂」は、『詩經』の「心之憂矣」(邶風柏舟など)、「我心則憂」(鄘風載馳)、「謂我心憂」(王風黍離)と、第二句「日月逾邁」は、『詩經』の「日月其邁」(唐風蟋蟀)と、いずれもほとんど同じであり、第三句「若弗云來」も、『詩經』の「曷云能來」(邶風雄雉)に近い。そればかりでなく、この三句が、いずれも四字句であることは、偶然であるよりも、意識的

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com